

童貞と高嶺の花がドロドロに溺れ合う話

サークル名..裏森

作者 ..うらもり

プロローグ…童貞と高嶺の花

第一章…高嶺の花との出会い

第二章…甘い毒、初めての火傷

第三章…侵食される日常、初めての「快楽」

第四章…縮まる距離、密室での快感

第五章…解放、そして始まる至高の時間

第六章…湯気の向こうの告白、溺れ合う夜

第七章…止まらない放流、夜の暴走

第八章…時間も忘れて、ただひたすらに

エピローグ…バニラの香りと、消えない熱

吉沢 大 : 身長 172cm 体重 64kg

高田 羽音 : 身長 163cm 体重 47kg F カップ

プロローグ…高嶺の花と童貞

「……んっ、……ふ、う……」

狭いアパートの一室。安物の扇風機が首を振るたび、生温い空気が二人の肌をなでる。

机の上に無造作に放り出された社会学のテキストは、もうその役割を終えていた。つい先ほどまで吉沢が文字を書き込んでいたはずのシャーペンシルが、床に転がり、頼りない音を立てる。

大の視界は、快楽という名の濁流に飲み込まれ、白く明滅していた。

一番奥まで押し込まれた意識の端で、自分の股間に顔を埋め、熱心に腰を振るミルクティーベージュの髪を見つめる。

「じゅぷ……、んむ、……ちゅ……れろ……っ」

静まり返った夜の部屋に、粘着質な水音が響き渡る。

高田羽音。

学園のアイドルであり、誰もが遠巻きに眺めるだけの「高嶺の花」が、今、自分の膝の間で、蕩けたような瞳をこちらに向けていた。

「ん……、吉沢、……ここ、すごいドクドクしてる……。ふふ、可愛い……っ」

羽音が口を離し、潤んだ唇を舌でなぞる。

彼女の指先が吉沢の太ももの内側を、じりじりと這い上がってきた。柔らかく、それでいて確かな熱を持った女の指。そのひと撫でごとに、吉沢の脊髄を痺れるような衝撃が駆け抜ける。

童貞の彼にとつて、それは快感という名の拷問に等しかった。

「は、……っ、高田、さん……っ、もう……」

「やだ。もつと……もつと、きみのこと知りたいもん……んっ、ちゅ、……じゅるるう……っ」
彼女は再び、逃がさないと云わんばかりに深く、その熱を口内に迎え入れた。

喉の奥まで吸い込まれるような圧迫感。舌先が敏感な先端を執拗に転がし、未経験な粘膜を容赦なく暴いていく。
「んぐ、……じゅぷ、……ん、……はぁ、……っ！」

喉を鳴らして飲み込むような音。鼻腔から抜ける、熱く、甘い吐息。吉沢がこれまで守ってきた、モノクロで平穩だった「風」の日常は、彼女が奏でる猥らな旋律によって、跡形もなく塗り替えられていく。

鼻をつくバニラの香りと、濃厚な蜜の味。

初めて知る「女」の深淵に、吉沢はただ、全身を硬直させて耐えることしかできなかった。

――始まりは、ほんの一週間前の、あの雨の日だった。

第一章…高嶺の花との出会い

吉沢大（よしざわだい）にとって、大学という場所は学びの舎である以上に「巨大な社交場」だった。

そしてそこは、自分のような「持たざる者」が、いかに効率よく気配を消して過ごせるかを試される試練の場でもあった。

入学して間もなく、大は悟った。この広大なキャンパスにおいて、人間関係を構築し、維持し続けるには、膨大なエネルギーが必要だ。誰かの顔色を窺い、流行の話題を追い、自分を実像以上に良く見せる。そんな徒労に耐えられなかった大は、早々に「一人でいること」を選んだ。

幸い、大学は高校までとは違い、孤独でいる自由が保障されている。二年生になった今、彼は一限の講義を終えると、迷わず自習室の隅へと向かう。誰にも干渉されず、ただ静かに流れる時間こそが、彼にとっての安寧であり、日常だった。

六月下旬の、湿り気を帯びた午後。

空調の低い駆動音が響く自習室で、大は社会学のレポート課題に没頭していた。

「ねえ」

不意に、すぐ耳元で声がした。

甘く、少し鼻にかかったような、自習室の静寂を切り裂く不協和音。

「ねえってば。きみ、同じ授業受けてるよね？社会学の」

大は驚いて顔を上げた。

そこにいたのは、彼の「風」の日常とは完全に対極に位置する存在——高田羽音（たかだのはのん）だった。ミルクティーベージュに染められた明るい巻き髪、薄手のトップスの下で柔らかな存在感を放つ、豊かな胸の膨ら

み。大にとっては、同じ空気を吸っていることすら不思議に思えるような、別世界の住人だった。

「……え、あ……」

「あはは。前の方でいつも、地味に、でも真面目にノート取ってるからさ。あ、私は高田羽音。よろしくね」

羽音は屈託のない視線を向け、髪を指先で弄んだ。大は返事に窮した。彼女が「前の方でノートを取っている自分」を、明確に一個人の「吉沢大」として認識していたことに、背筋が泡立つような感覚を覚える。

「用っていうか、助けてほしいっていうか……。これ、意味わかんなくない？ ちよつと、教えてくんないかなって」
彼女はそう言つて、至近距離で大の顔を覗き込んだ。

その日は一時間ほど、大は自分の課題を脇に置いて彼女に勉強を教えることになった。

「この『構築主義』って概念は、物事の真理じゃなくて、社会がどう意味付けたかを考えるんだ」

「へえー、なるほどね」

大の拙い説明を、羽音は感心したように聞き入っていた。

「今日はありがと！ またね！」

去り際、彼女が見せた屈託のない笑顔。それが、大の日常という名の防壁が崩れ始めた瞬間だった。

それからの数日間、大学の廊下ですれ違えば、彼女は当然のように「あ、吉沢！ おはよー」と声をかけてくるようになった。

彼女の隣を歩く取り巻きの男子たちの、刺すような冷ややかな視線を浴びるたび、大は居心地の悪さに身を縮めたが、羽音自身は気にする様子もなかった。

そして、一週間が経った日の放課後。

講義を終え、いつものように自習室へ向かおうとする大の背中に、弾んだ声が届いた。

「吉沢！ ちよつと待って！」

振り返ると、そこには人混みを縫うようにして駆け寄ってくる羽音がいた。

短いスカートの裾を揺らし、少し肩を上下させて大の前に立つ。

「今日も社会学、付き合ってほしいな。一人じゃ絶対無理だもん」

断る隙も与えられないまま、大は彼女に伴われて自習室へと向かった。しかし、あいにくその日は試験前というところもあり、広い室内は隙間なく埋まっていた。近場のカフェも回ってみたが、どこも学生の熱気で溢れかえっている。

「うわ、最悪……。どこも座れないじゃん」

羽音が唇を尖らせて不満を漏らす。そして、ふと思いついたように大の顔を覗き込んだ。

「ねえ、吉沢の家ってここから近いでしょ？ じゃあ、そこで教えてよ。今日中に終わらせないと間に合わないんだもん」

戸惑う大をよそに、彼女は「決定ね！」と笑って歩き出した。

道中のコンビニで、彼女は「お札にこれ買っतीयこうよ」と、スナック菓子と冷えたジュースを迷わずカゴに放り込んだ。

大の狭い六畳一間のアパート。殺風景な男の一人暮らしの部屋に、高田羽音が座っている。

「ふう……。エアコン、まだ効かないね」

羽音はローテールブルの前に座り、暑そうに首筋の髪をかき上げた。

最初は、驚くほど真面目に時間が過ぎた。大は彼女のノートを確認しながら、教授が強調していたポイントを丁寧に解説していく。

「ここはさ、理論だけじゃなくて事例も一緒に書くと点数高くなるよ」

「あ、なるほど。吉沢って本当に教えるの上手いよね。頭いいんだ」

至近距離でそんなことを言われるたび、大は意識をノートに戻すのに必死だった。

二人の距離は、自習室にいた時よりも明らかに近くなっている。

彼女がペンを動かすたび、薄いトップスの下で豊かな胸が揺れ、その曲線が腕に触れそうになる。大の脳内では、勉強の内容と、隣から漂うバニラの香りが激しくせめぎ合っていた。

気づけば、大の股間には隠しようのない熱が溜まっていた。ズボンの生地が限界まで張り詰め、鈍い快感と圧迫感が彼を襲う。

（やばい……落ち着け、俺……）

冷や汗をかきながら、大はなんとか課題を最後まで終わらせた。

「終わったー！ ありがと、吉沢」

羽音はそう言うのと、両腕を頭上に突き上げて大きく伸びをした。

その動作に伴い、薄い生地トップスが限界まで引き絞られ、彼女の誇る豊かな胸の起伏が無防備に強調される。せり出した膨らみの重みで布地が張り詰める様子に、大は視線を釘付けにされた。

「……っ」

あまりの生々しさに大は慌てて視線を逸らしたが、股間の熱はさらにその硬さを増していく。

「お疲れ様。……これ、食べようよ」

羽音は屈託なくポテトチップスを開け、二人の間に置いた。そこからは、勉強の緊張感から解き放たれた、他愛ない雑談が始まった。

しかし、会話が進むにつれ、部屋の空気は重く、甘く、変質していった。外はもう真っ暗で、扇風機の回る音だけが部屋の沈黙を際立たせる。

「……吉沢」

不意に羽音が言葉を切り、少し頬を赤らめて大を見つめた。

「さつきから、ずっと我慢してるでしょ？」

「え……？」

羽音の視線は、隠しようもなく膨らんだ大の股間に向けられていた。大は顔から火が出るほどの羞恥に襲われ、咄嗟に手で隠そうとする。

「あ、いや、これは……その、ごめん……っ」

しかし、羽音は逃がさない。彼女は決心したように大の方へと膝を繰り寄せた。

「……うん。私こそ、気づいてたのに黙っててごめん」

羽音の声は、いつの間にか湿り気を帯びた熱い響きに変わっていた。

彼女は震える指先を伸ばし、大の膝の上で膨らんでいる「それ」に、そつと触れた。

「……っ！」

大の背中に電気が走る。羽音はそのまま、手のひら全体で熱い塊を包み込むように握った。

じりじりと、布越しに伝わる女の掌の質感。彼女はそれを確かめるように、ゆつくりと、上下に摩り始めた。

「ん……、すごい……。ここ、こんなに固くなってる……」

羽音の瞳は、もういつもの明るい大学生のものではなかった。潤んだ瞳が、熱く大を射抜く。

彼女の指が、先端の形をなぞるように円を描き、さらに力を込めて強く圧迫する。

童貞の大にとって、それは未知の快感という名の拷問だった。声にならない悲鳴が漏れ、腰が勝手に跳ねる。

「……あ、……あつ……」

「ふふ、可愛い。……ねえ、吉沢。頑張って教えてくれたお礼、してあげよっか」

羽音は妖艶な微笑みを浮かべると、もう片方の手で大のズボンのベルトに指をかけた。

カチャリ、と金具の鳴る音が、静かな部屋に終わりの合図のように響いた。

彼女の手は迷うことなく、ジッパを下ろし、大の剥き出しの熱量へと直接伸びていった。